

「なまり」を笑いに

迫る

方言詩人伊奈かっぺいさん

雪国の夜は冷え込んでいたが、客席は笑い声で温まっていた。ステージに立つ姿は、背筋がしゃんと伸びていて昔と変わらない。三十数年前、テレビで活躍していた頃の姿を挙げれば、顔ひげか。しかも白い。そんなふつと年月を重ねたが、よく通る声で津軽弁をテンポよく発して行く。

タレントの伊奈かっぺいさん(76)。方言詩人として津軽弁を取り入れた自作の「言葉遊び」を発表している。

ブームになった懐かしい本のタイトルも、この人の話術によって笑いになる。「気づはりのすすめ」ってNHKの(鈴木健二・元アナウンサー)が書いた本か



「気づはり」なら楽しくなるかというだけで、この年まで生きてきました。トークライブで観客に語りかける伊奈かっぺいさん。青森市で1月、北山夏帆撮影

なと思うでしょ。違いますよ。「気づはりのすすめ」っていつのは津軽弁ではしゃべるんじゃないってことなんです。聞くだけにしなさいって」

「聞くだけ」の「だけ」は津軽弁では「はり」。「気づはりのすすめ」は「聞くだけのすすめ」の意味になる。方言と標準語を交えた軽妙なトークに客席から「すすす」と笑いが漏れる。

青森市内のホールで1月13日の夜に開催されたトークライブ「十三日の金曜日」。新型コロナウイルスの感染拡大で中断したことはあったが、1975年から半世紀近く続けてきた。

「ひくひんとんきー」標準語ではハンバーグレストランの店名に聞こえる

「津軽弁では、どれくらい驚いたことかというのを「ひくひり」とんき」と言います。標準語と違うイントネーションで言葉の意味を聞いた約250人の客がどっと沸いた。

暮らしを題材に、手描きのイラストを交えた言葉遊び

「津軽弁は汚いまいね」

かっぺいさんは戦後間もなく、青森県弘前市で生まれた。両親も隣近所の人もみんな津軽弁で話していた。小学生になるとラジオで落語をよく聞くように。ズースト弁ではない言葉があることに気がついた。

中学一年の時だった。先生のある発言によって、かっぺいさんの頭の中は混乱し始める。「津軽弁は汚い言葉だはんで、人前でしゃべるのは、まいね(津軽弁で「駄目」)。そう言っている先生も津軽弁なのに、ラジオみたいな話し方をしないといけないのか」。

そんな頃、学校の図書室で青森市生まれの方言詩人、高木恭造(1903〜87年)の詩集を手にとった。そこには津軽弁で創作した詩が収められていた。

かっぺいさんは「汚い言葉」と言われた方言での詩に衝撃を受けた。故郷(クニ)吹雪(フキ)、雪(ユキ)、棘(ニス)、理髪屋(ジャンボヤ)……。漢字に方言の音をルビで振る表現の豊かさに感動した。「そこから『方言ってなんなんだ』ってすげえ意識するようになった」

地元短大を出た後、21

びを、次々とステージの壁にスライドで映し出す。ハサニシキでおにぎり具はコシヒカリ

「これ食べている最中に(お米の味のの違い)に気が付く人いるでしょうか。何がグルメだ。(美食家は)うそつき、バカやる」。世にはびこる食通ブームに突っ込みを入れると、大きな笑いが、会場を包んだ。ライブには全国からファンが集う。堺市の会社員、大江泰浩さん(55)は浪人中で人生に悩んでいた20歳の頃に、かっぺいさんの本に出会った。楽しくないことでも楽しくするという考え方に励まされた。それから35年、ほぼ毎回見に来ていた。この日も大阪から足を運んだ。「単なるダジャレでもちゃんとした笑いに持っていく。その面白さは今も変わりませんね」

歳の時に青森放送(RAB)に入社した。6畳一間の一人暮らし。時間を持て余して始めたのが日記をつけることだった。13歳で母、18歳で父をそれぞれ病気で亡くし「苦しいことや悲しいことは回らうからやめて」るこの思いで生きていた。だから「楽しいこと以外は書かない」と決めた。楽しいことがなければ、想像したことをつづけた。

高木に触発された方言詩の創作に挑戦してみた。ただ、方言詩は「生活苦とか暗いものが多い」と感じていたのも事実。「それで、方言を使って笑い話を作ったら2倍、3倍面白くなるぞ」と思い付いた」と当時を振り返る。その「笑える方言詩」は後に、トークライブなどで笑いを誘う作品につながっていく。

日記に書きためた方言詩をまとめて27歳で自費出版した。タイトルは「消ゴムでかいた落書き(74年)」。独り身の日常をユーモラスに詠んだ作品が多い。本は話題になり、青森放送が関わる全国放送のラジオ番組で朗読することになった。東京のレコード会社の目に留まり、77年に方言詩を吹き込

んだレコードを出した。「青森に愛なサラリーマンがいる」。そんなうわさが広まり「徹子の部屋」(テレビ朝日系)に出演するなど東京から仕事の依頼が来るようになった。86〜88年には、バラエティー番組「かっぺい&アッコのおかしな二人」(日本テレビ系)の司会を務めた。相手は歌手の和田アキ子さん。大抜てきだった。

取材・文 後藤豪 3面につづく